

# 知床岬遺跡のコンプラ瓶

平河内 毅

099-4113 北海道斜里郡斜里町本町 49-2, 斜里町立知床博物館

## The Compr Bottle Collected in Shiretoko Cape Site

HIRAKŌCHI Tsuyoshi

Shiretoko Museum, 49-2 Hon-machi, Shari, Hokkaido 099-4113, Japan ✉[tsuyoshi-b@apost.plala.or.jp](mailto:tsuyoshi-b@apost.plala.or.jp)

We examined a compra bottle collected at Shiretoko Cape site, which was used by the Ainu in the last of Edo period. I guess that they got the bottle by emigration to Nemuro, Notsuke Peninsula and Kunashiri Island. Consequently, in Hokkaido, compra bottles were used at Ainu settlements not only around the trading ports, but also far from the ports.

### はじめに

コンプラ瓶は江戸後期から明治期にかけて長崎県波佐見の窯で生産されていた3合ほどの容量の白磁瓶で、器高は約20 cm、特徴は灰色の器肌に藍色の顔料でJAPANSCHZOYA（ヤパンセソヤ：日本の醤油）、JAPANSCH ZAKY（ヤパンセサキ：日本の酒）などオランダ語の文字が記されており、このパッケージを見れば酒瓶か醤油瓶かが区別できる。文字は江戸時代のもは呉須による手染付け、明治期のもはコバルトによる型紙摺りのものが一般的である（長沼1997）。

特徴的な呼び名の由来となったコンプラとは、ポルトガル語のコンプラドル（comprador）の略であり、長崎の出島のオランダ商館員のために様々な物資を調達した「コンプラ仲間」などと呼ばれる特権商人のことを指している。鎖国政策下の日本ではオランダ人たちは商館のある出島から自由に入出入りすることができず、彼らに代わってこのコンプラ仲間が日用品等を調達していた。また、コンプラ仲間の仕事は物資の調達ばかりでなく、資金を預かり利息を支払うといったことも行っていたようである（野崎ら2013）。

日本の酒や醤油はすでに江戸時代からオランダ東インド会社によって海外へ輸出され、醤油は

ソースと混ぜて料理の隠し味に使われ、酒は食前酒として飲まれていたとされる（扇浦2006）。特権商人であるコンプラ仲間が売り込み用に発注し、生まれたのがコンプラ瓶である。

日本の酒や醤油を詰めて東南アジアやヨーロッパへと輸出されたコンプラ瓶であるが、北海道においては沿岸部における近世遺跡から多く発見される。

19世紀中葉に爆発的に出土量が増加する膳皿、中甕、徳利から成る「幕末蝦夷地3点セット」に含まれ、アイヌの人々が初めて日常生活で使用した陶磁器の一つと考えられている（関根・佐藤2009）。

江戸時代のもは1820–60年代頃に位置づけられるが、北海道内での流通時期は1850–60年代と考えられている（関根・佐藤2009）。

しかし、実際のところアイヌの人々が日常的に使用したと捉えられるコンプラ瓶の出土例は限られているのが現状である。ところが、知床岬で発見されたコンプラ瓶はアイヌ文化期の送り場と考えられる場所で採集されており、アイヌの人々が使用した可能性が非常に高い。

では、本資料は長崎から知床岬まで一体どのような経路を辿ってきたのだろうか。北海道内への

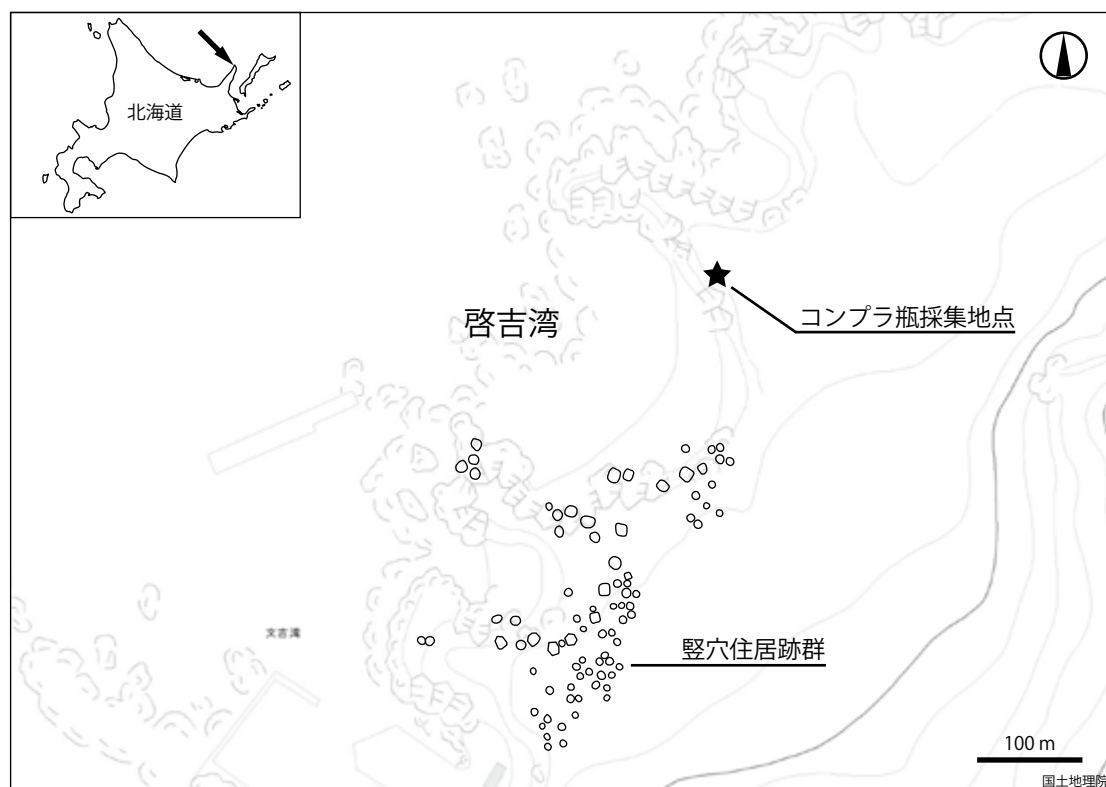


図1. コンプラ瓶の採集地点.



図2. 啓吉湾と竪穴住居跡.

流入の原因として長沼孝氏は以下の2つを挙げている。1つは他の肥前陶磁器とともに日常の雑器として持ち込まれた可能性、もう1つは北前船や長崎俵物などに関連した蝦夷地と長崎の交易の過程で、航海中の消費用として船に持ち込まれた可能性である(長沼1997)。しかし、これ以後コンプ

ラ瓶についての研究は行われておらず、北海道への流通経路については曖昧なままである。

### 知床岬遺跡のコンプラ瓶

#### 1. 採集地および遺跡位置

本資料は、1985(昭和60)年6月9日に斜里町立知床博物館が中心となって実施した知床岬現地調査の際に採集されたものである。

採集地は知床岬西岸の平坦地上であり、知床岬遺跡として登載されている場所にあたる(図1, 2)。過去の発掘調査から、主に縄文時代、オホツク文化期、アイヌ文化期の3時期にわたって利用されていたことが明らかとなっており(松下ら1964; 大井1984)、良好に遺跡が保存されているため、現在でも地表に土器や石器、鉄鍋や陶磁器の破片等が露出している様子を見ることができる。

採集された位置は、竪穴住居跡群があるエリアからやや北東側に進んだ段丘面の縁に近い場所である(図1, 2)。この周囲にはコンプラ瓶のみなら

図3. 実測図.



ず、少なくとも10個体以上の鉄鍋が壊れた状態で確認されており、主にアイヌ文化期の遺物が集中的に採集されている。

当時、鉄鍋は非常に高価なものであり、遺跡内から10個体以上まとまって見つかることは北海道内では稀である。鉄鍋だけでなく、火皿や陶磁器類が多く見つかることから、この地はアイヌ文化期の送り場跡であると推察される。知床岬に暮らしたアイヌの人々が鉄鍋や陶磁器類に対しても送り儀礼を行っているとするれば、和人のものを受容しつつも幕末期までアイヌ独特の習慣を保持していたといえよう。

なお、松浦武四郎の『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』には、1858（安政5）年の知床岬にはアイヌの小屋が3軒あったと記載されている。このアイヌ集落はシレトコ村と呼ばれ、啓吉湾の周辺であったとされており、コンブラ瓶や鉄鍋などの出土位置とも合致している。また、鮭漁の季節には外からの人の出入りも多かったと考えられる。これらのことから、このコンブラ瓶の使用人はシレトコ村の住人もしくは鮭漁の時期にやってきたアイヌの人々と推測できる。



図4. 知床岬遺跡のコンブラ瓶.

## 2. 形態

本資料は採集された時点で口縁および頸部を欠損していたが、それ以外は比較的良好な状態で残存していた（図3、4）。形態は器高16.1 cm（残存部）、底径6.6 cmであり、生産時の器高を推定すると約20 cmと一般的な大きさである。器面には

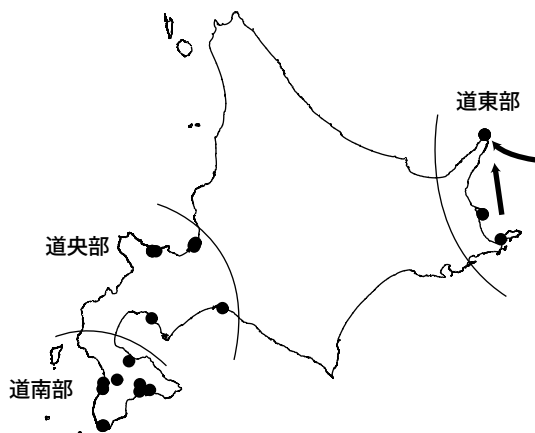


図5. 北海道内の出土地および知床岬遺跡への搬入経路。

JAPANSCHZAKY (ヤパンセサキ: 日本の酒) と呉須で手書きされており, ZAKYは酒を意味することから酒瓶として生産されたものである。

### 北海道内の出土状況

表に北海道内の遺跡ごとの用途別個体数を推定した結果を示す。個体数は既存文献に記載されている口縁部および底部の個数を基準に計上したが、胴部のみものは染付け等から判断した。その結果、北海道内では本資料も含め合計65個体以上が発見されており、そのうち酒瓶が29個体以上、醤油瓶が10個体以上、と酒瓶の数が圧倒的に多かった(表)。つまり、酒の需要が多いということになるが、調味料として使用される醤油に比べ酒は消費が速いため、このように酒瓶の出土量が多い状況となっていると考えられる。

また、出土もしくは採集されているのは、知床岬遺跡を含めて24箇所であった(図5, 表)。漁場関係、アイヌ文化期の貝塚、陣屋跡、館跡など遺跡の性格は様々であり、一定の傾向を見出せなかった。

地域では主に道南部、道中央部、道東部の3地域に分布が限られる。

道南部は函館、松前、江差の3港が本州方面との交易港であったため、出土量が多いと考えられる。中でも最も多くコンプラ瓶が出土しているのは北方警備の拠点として築かれた五稜郭である。五稜

郭内に設けられた箱館奉行所は1864(元治元)年に完成し、1871(明治4)年に解体されるまでのわずか7年間という非常に短い存続期間であったため、出土資料についても同期間に限定される。

道中央部では、余市や石狩などが北前船の寄港地であり出土地点とも概ね一致している。近年では、石狩川河口周辺において他の陶磁器類とともにコンプラ瓶の破片が2点採集されており(木戸・石橋2014)、資料が増加している。さらに、厚田村では25点ほどの破片が出土したとされており(松下1990)、おそらく聚富川口遺跡から出土した資料のことを指していると思われる。また、厚田村以北からは出土が確認できていない。

道東部では、幕末期の番屋跡とされる穂香右岸遺跡と、国後島へ渡海するための要衝および周辺地域との交通の拠点であったとされる野付通行屋跡(1799(寛政11)年建造)から多く見つかった。

以上のように道南部、道中央部、道東部と出土が集中する一方で、道北部および十勝周辺からはコンプラ瓶が発見されていない。単に近世遺跡の発掘事例が少なく、見つからないだけという可能性もあるが、現時点でこれだけはっきりとした分布傾向が示されていることから上記の3地域のようにまとまった流通はなかったであろう。

### 知床岬遺跡への流通経路

知床岬遺跡出土のコンプラ瓶は北海道内においてオホーツク海沿岸で唯一採集された、また交易港から離れた地域で唯一採集されたコンプラ瓶である(図5)、本資料はどのような流通経路で運ばれてきたのだろうか。まず、道北部で全くコンプラ瓶が見つからない状況からも、北からの海運で流通してきた可能性は低い。一方で同じ道東部で、より南に位置する野付半島や根室ではそれぞれ9個体見つかり、全道的に見ても1遺跡から出土する量が多い傾向にあった。にもかかわらず、知床岬遺跡で見つかったものは1個体のみであり、他に破片も採集されていない。これらより、知床岬での出土状況は明らかに道東部の他の2遺跡と異なることがわかる。

表. 北海道内のコンブラ瓶出土遺跡と出土個体数. 各個体数は既存文献の記載を元に, 筆者が残存部位から推測した. 個体数不明のものは-とした.

No.	地域	所在地	出土地	調査区および遺構名	ZAKY	ZOYA <sup>a</sup>	不明	合計	文献
1	道南	上ノ国町	字向浜地区	地区12	0	0	1	1	斉藤・三浦 (2001)
2		松前町	福山城跡	三ノ丸石垣の明治期盛土	0	0	1	1	前田 (2004)
				C-5	1	0	1	2	前田 (1995)
				SG-4	0	0	1	1	前田 (1994)
				SM93	0	0	1	1	前田 (1998)
3			東山遺跡	溝状遺構, 包含層, 表探	2	1	0	3	前田ら (2005)
4			福山城下寺院街	不明	-	-	-	-	関根・佐藤 (2009)
5			福山城下町遺跡	Dブロック	0	0	1	1	前田 (2008)
6		江差町	開陽丸	海底	-	-	-	-	長沼 (1997)
7		北斗市	矢不來天満宮跡	調査区内	1	0	1	2	畑ら (1988)
8			松前戸切地陣屋	陣屋跡	1	0	0	1	前田 (1985)
9			厚沢部町と北斗市の町境付近の山林	表探	1	0	0	1	関根・佐藤 (2009)
10		厚沢部町	館村開墾御役所跡	表探	0	1	0	1	石井 (2008)
11		函館市	五稜郭跡	箱館奉行所跡	5	4(2)	2	11	田原 (1990)
12	道央	伊達市	有珠善光寺2遺跡	1・4号貝塚	1	0	0	1	野村ら (2006)
13		余市町	大川遺跡	SM-1.4 (貝塚)	1	0	0	1	菅野 (2005)
				遺構外	4	0	2以上	6以上	乾 (2000a)
14			入舟遺跡	SM-5 (貝塚)	0	0	1以上	1以上	乾・小川 (2000)
				SM-9	0	0	1以上	1	乾 (2000b)
				遺構外	2	0	0	2以上	岡田・宮 (1999)
15			フゴッペ貝塚	攪乱およびフゴッペ川の氾濫原	1	0	0	1以上	千葉ら (1991)
16		石狩市	聚富川口遺跡	不明	-	-	-	-	長沼 (1997)
17			若生C遺跡	表探	1	0	3(1)	3以上	木戸・平河内 (2013)
18			石狩浜河口	漂着	0	0	1	1	木戸・石橋 (2014)
19			高島町信邸跡	表探	0	0	1	1	
20		苫小牧市	弁天貝塚	不明	-	-	-	-	佐藤 (1987), 佐藤ら (1988), 佐藤・宮夫 (1989), 長沼 (1997)
21	道東	根室市	穂香川右岸遺跡	調査区内	4	1	4	9	越田・愛場 (2005)
22		別海町	野付キラク町跡	表探	1	3 (1)	2	6	長沼 (1997)
23			野付通行屋	C-14, B-14・15区グリッド	1	0	2	3	梶田 (2004), 石渡 (2007)
24		斜里町	知床岬遺跡	表探 (送り場)	1	0	0	1	-
合計					29	10(3)	27以上	65以上	-

<sup>a</sup>括弧内は1STE. SOORTと染付けされたものの個体数.

このことから、野付半島や根室など要衝となる場所は北前船などの交易船によってコンプラ瓶が流通したが、知床岬では野付半島や根室、あるいは国後島などで入手されたものが人の動きに伴って移動したと推測できる。知床岬遺跡出土のコンプラ瓶はこの場所に暮らしたアイヌの人々の出稼ぎの足取りを示す資料であると言えるだろう。

## 引用文献

- 石井淳平(編・著). 2008. 史跡松前氏城跡 福山城跡 館城跡 館城跡4: 平成19年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書. 厚沢部町教育委員会発掘調査報告書6. 64 pp. 厚沢部町教育委員会, 厚沢部.
- 石渡一人(編・著). 2007. 自然崩壊に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書. 野付通行屋跡遺跡2. 166 pp. 別海町教育委員会, 別海.
- 乾芳宏(編・著). 2000a. 大川遺跡: (1998年度) 余市橋線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書. 12 pls + iv + 104 pp. 余市町教育委員会, 余市.
- 乾芳宏(編・著). 2000b. 入舟遺跡: 余市川改修事業および余市橋線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書. 13 pls + vi + 110 pp. 余市町教育委員会, 余市.
- 乾芳宏・小川康和(編・著). 2000. 墓墳篇2: 余市川改修事業に伴う1989から1994年度大川遺跡発掘調査報告書. 大川遺跡における考古学的調査3. 351 pp. 余市町教育委員会, 余市.
- 岡田淳子・宮宏明(編・著). 1999. 入舟遺跡における考古学的調査: 余市川改修事業に伴う1995・1997年度入舟遺跡発掘調査報告書. iv + 460 pp. 余市町教育委員会, 余市.
- 大井晴男. 1984. 斜里町のオホーツク文化遺跡について. 知床博物館研究報告6: 17-66.
- 扇浦正義. 2006. コンプラ瓶の生産と流通. 小林昌二(監), 原直史・大橋康二(編), 近世篇2. 日本海域歴史大系5. pp. 81-84. 清文堂出版, 大阪.
- 木戸奈央子・石橋孝夫. 2014. 石狩浜漂着物考古学ノート2: 石狩浜・石狩川河口に漂着した陶磁器. いしかり砂丘の風資料館紀要4: 55-59.
- 木戸奈央子・平河内毅. 2013. 石狩市若生C遺跡の出土陶磁器について. いしかり砂丘の風資料館紀要3: 1-10.
- 越田雅司・愛場和人(編・著). 2005. 穂香川右岸遺跡: 一般国道44号根室道路建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書. 北海道埋蔵文化財センター調査報告書212. 144 pp + 54 pls. 北海道埋蔵文化財センター, 札幌.
- 斉藤邦典・三浦英俊(編・著). 2001. 洲崎館跡内外分布調査 比石館内外分布調査 字向浜地区分布調査. 町内遺跡発掘調査事業報告書4. 90 pp + 20 pls. 上ノ国町教育委員, 上ノ国.
- 佐藤一夫(編・著). 1987. 弁天貝塚1: 幕末期以降に於けるアイヌ貝塚の発掘調査報告書. 121 pp. 苫小牧市埋蔵文化財調査センター, 苫小牧.
- 佐藤一夫・宮夫靖夫・工藤肇・渡辺俊一(編・著). 1988. 弁天貝塚2: 幕末期以降に於けるアイヌ貝塚の発掘調査報告書. 96 pp. 苫小牧市埋蔵文化財調査センター, 苫小牧.
- 佐藤一夫・宮夫靖夫(編・著). 1989. 弁天貝塚3: 幕末期以降に於けるアイヌ貝塚の発掘調査報告書. 175 pp. 苫小牧市埋蔵文化財調査センター, 苫小牧.
- 管野修広. 2005. 中・近世から近代の遺構・遺物. 青野友哉(編・著), 有珠善光寺2遺跡発掘調査報告書. pp. 19-41. 伊達市教育委員会, 伊達.
- 梶田光明・石渡一人・上杉大洋(編・著). 2004. 野付通行屋跡遺跡1: 自然崩壊に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書. 80 pp. 別海町教育委員会, 別海.
- 関根達人・佐藤雄生. 2009. 出土陶磁器からみた蝦夷地の内国化. 日本考古学28: 69-87.
- 田原良信(編・著). 1990. 特別史跡五稜郭跡: 箱館奉行所跡発掘調査報告書. 122 pp + 72 pls. 函館市教育委員会, 函館.
- 千葉英一・長沼孝・熊谷仁志・中田裕香・鈴木信(編・著). 1991. 余市町フゴッペ貝塚: 北後志東部地区広域営農道整備事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書; 本文編. 724 pp + 12 pls. 北海道埋蔵文化財センター, 札幌.

- 長沼孝. 1997. コンプラ瓶. 大塚初重・白石太一郎・西谷正・町田章(編), 対外交渉, 考古学による日本の歴史10. pp. 179-182. 雄山閣出版, 東京.
- 野崎妙・海老原温子・ハケメ L. E.・宮崎克則. 2013. 1831年ビュルガーがシーボルトに出した書簡. 九州大学総合研究博物館研究報告11: 19-52.
- 野村祐一・神林哲夫・高橋昇・宮崎雅春・吉田力・田原良信(編・著). 2006. 特別史跡五稜郭跡: 平成17年度復元整備事業に伴う発掘調査報告書. 139 pp + 5 pls. 函館市教育委員会, 函館.
- 畑宏明・前田正憲・長沼孝・花岡正光(編・著). 1988. 矢不来天満宮跡: 一般国道228号上磯町茂辺地法面工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書. 北海道埋蔵文化財センター調査報告書47. 89 pp + pl. 北海道埋蔵文化財センター, 札幌.
- 前田正憲(編・著). 1985. 史跡松前藩戸切地陣屋跡: 昭和59年度発掘調査概要報告. 70 pp. 上磯町教育委員会, 上磯.
- 前田正憲(編・著). 1994. 平成5年度発掘調査概要報告. 史跡福山城11. 84 pp. 松前町教育委員会, 松前.
- 前田正憲(編・著). 1995. 平成6年度発掘調査概要報告. 史跡福山城12. 83 pp. 松前町教育委員会, 松前.
- 前田正憲(編・著). 1998. 平成9年度発掘調査概要報告. 史跡福山城15. 88 pp. 松前町教育委員会, 松前.
- 前田正憲(編・著). 2004. 史跡松前氏城跡 福山城跡1. 52 pp. 松前町教育委員会, 松前.
- 前田正憲・谷岡康孝・天方博章・竹内友香(編・著). 2005. 東山遺跡: 代行事業町道朝日豊岡線改良工事に関わる埋蔵文化財発掘調査報告; 本文編. 520 pp + 2 pls. 松前町教育委員会, 松前.
- 前田正憲(編・著). 2008. 福山城下町遺跡4: 道道松前港線改良工事に関わる発掘調査報告書. 42 pp. 松前町教育委員会, 松前.
- 松下亘・米村哲英・畠山三郎太・安倍三郎. 1964. 知床岬: 知床半島の古代文化をさぐる. 北海道発掘調査シリーズ7. 67 pp. 北海道出版企画センター, 札幌.
- 松下亘. 1990. 大川遺跡出土陶磁器について. 余市町教育委員会(編), 1989年度大川遺跡発掘調査概報. pp. 32-35. 余市町教育委員会, 余市.